

## 言行一致訓練の適用による発達障害児のセルフコントロールの促進

山下 佳子  
(筑波大学大学院)

中野 良顯  
(筑波大学)

### 1. 目的

言行一致訓練とは、個人の言語反応と、その言語の意味する非言語反応(行為)とを一致させる行動、つまり約束を守る行動を確立する訓練である。リスレイ(Risley, 1977)は、就学前児童の研究においてその効果を例証し、言行一致訓練が子どものセルフコントロール力を育成するうえで有効な方法であることを示唆した。ここでは、小集団活動場面で、教師に「もうしない」という言語反応を自発しつつ、その直後に問題行動を頻繁に繰り返す、ひとりの発達遅滞の中学生男児に対して、言行一致訓練を適用した過程と結果とを報告する。

### 2. 方法

① 対象児： T男は指導開始時、公立中学校(特殊学級)1年生。知的、社会的、情緒的、言語的に遅れがみられるが、記憶力に優れ、言語も簡単な形式を伝達的に使用することができる。学校では特殊学級での課題をてきぱきこなす。しかし授業中に許可を得ず突然教室を出ていったり、大声でコマーシャル語を自発したりする。また環境の変化に著しく抵抗し、時間割りが変更になったりすると機嫌が悪くなり、時にはかんしゃくをおこす。また何かの原因でいらいとすると、物に八つ当たりしたり女の子をつねったりする。

② 場面： 床にじゅうたんを敷き詰めた大学の臨床室を用い、そこに疑似教室場面を作る。中央に大机を置き、その周囲に4、5名の大学生(生徒役)と、対象児(本児の他に2名)が座り、教師役の大学生1名が様々な小集団活動を通して適切な社会技能の指導を行う。小集団活動の種類は、あいさつ、今日の予定の説明と質疑、歌、勉強、ゲーム、おやつ、そうじであり、この順で展開される。

③ 時間： 訓練期間は、1985年10月から1986年10月までの約1年の合計63セッション。セッションは週2回、火曜と木曜の夕方5時から約1時間30分行われた。

④ 従属変数(標的行動)： 標的行動はT男が特に頻繁に自発する以下の3種の行動に決定した。①戸棚をあける行動、②離席行動、③場面と関係のないことばを言う行動(テレビのコマーシャル語や、活動の

文脈と全く関係のない妨害的なせりふの自発)。

### ⑤ 独立変数(指導方法)：

<技法の選択> 標的行動を行動分析モデル(S-O-R-K-Cモデル)に従って観察した結果、①T男の問題行動は、注目要求機能を持ち、自己制御欠如のために生起する、②T男は、問題行動に対して教師から注意されると、即座に「今度からしない」と弁明するが、それは自己制御機能を獲得していない(言行不一致)、ことが推定された。このことからT男の問題行動に対して、言行一致訓練を中心技法として用いることにした。この他に補足的に使用する技法として、タイムアウト、消去を選択した。

### <技法の手続き> (1) 言行一致訓練・・・

①約束の手続き(小集団訓練の開始時点) 教師は、小集団場面で「○○君が、約束することは何ですか」とT男に質問し、T男が正しく言えたらそれを褒める。そしてその約束が守れなかった時はおやつを抜きにすることを、T男に通告する。②言行一致・言行不一致に対するフィードバックの手続き(小集団訓練中) T男が問題行動を自発したら、即座に教師は「～をしたからおやつは抜きです。」と一回だけ言う。たとえT男が「今度からしない。」と言ってもそれには取り合わない。③結果の手続き(おやつの直前の時点) 教師は「約束していたことは何ですか。」とT男にたずねる。T男が正しく言えたら、それを褒める。次に教師は、約束が守れたか否かをたずねる(言行一致に関して自己評価させる)。T男の自己評価が正しければ、それを褒め、間違っていたら訂正させる。そして約束が守れた(言行一致)時は、おやつを食べることを許可する。約束が守れなかった(言行不一致)時は、おやつ抜きを宣告し、おやつの時間の間(5～7分)部屋の隅にあるソファに座って待機するようにT男に命じる(排除型タイムアウト)。以上の手続きの適用にあたっては、プロンプト・カード(約束文章を記述した、約7×2.5cmのカード)を使用して言語行動を促進した。(2)タイムアウト・・・この技法は、言行一致訓練の一部として用いた(上述した通り)。この他言行一致訓練の開始以前に、単独でも使用し

た。

(3) 消去・・・T男が関係のない言葉を自発しても、教師や他の生徒は一切の社会的対人的反応(例：T男を見ること、笑うこと)を行わないことにした。

<技法の適用> 技法の適用にあたっては、最小制約治療モデル(常に最初に嫌悪的でない技法を適用する)に従った。また、拮抗する望ましい社会的行動には、徹底して強化を与えるようにした。

(1) 言行一致訓練は行動間複数ベースラインデザインに従い、戸棚あけ、離席、関係のないことばに対して順次適用するよう計画した。またこの介入は、プロンプト・カードの使用と、タイムアウトの使用の有無によって、3つの段階(図1参照)が区別された。

(2) 単独でタイムアウトを採用したのは、離席であった。

(3) 消去は、最小制約治療モデルに従い、場面と関係のないことばをいう行動のみに適用した。しかしその効果がみられなかったため、のちにタイムアウトを伴う言行一致訓練を適用することに決定した。

⑥ デザイン： 言行一致訓練は、行動間複数ベースラインデザインを用いて、3つの標的行動に時期をずらして適用した。(ただし、場面と関係のないことばを言う行動には、ABAリバーサルデザインを、戸棚をあける行動と離席行動には、ABAデザインを併用した。)

⑦ 観察と記録： セッションの全過程は、遠隔操作装置に接続された2台のビデオカメラによって、合成画面で記録された。3種の標的行動は、再生画面を用い、それぞれの頻度を測定した。そのうち、場面と関係のないことばを言う行動は、一単語(修飾語も含む)ないし一文(遅延性エコラリアに限る)を1回と数えることにした。

⑧ 信頼度： 二人の独立した観察者によって、全セッション中の約30%について査定した。平均信頼度は90%(戸棚あけは99%、離席は92%、関係のないことばは79%)であった。

### 3. 結果

図1は、3種の標的行動に対して、言行一致訓練を時間をずらして順次適用した結果を示している。言行一致訓練を含む小集団活動プログラムは、T男の3種の標的行動を減少させ、その結果を長期にわたって維

持させた。そして望ましい社会的行動(課題刺激に注目し課題遂行行動に取り組む、集団場面での教師の教示に注目し反応する、教師や友だちに適切に質問したり応答したりする等)を獲得ないし、改善させることに成功した。T男は、約束を守り(言行一致)、問題行動をセルフコントロールできるようになった。

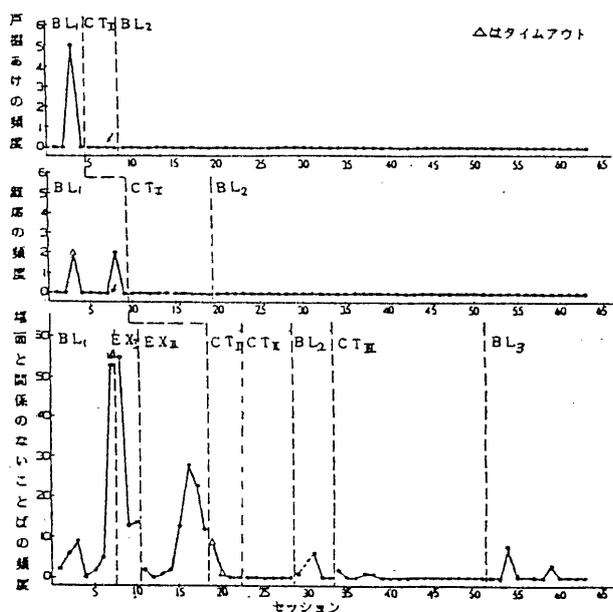


図1 1セッション中にT男が目発した3種の問題行動の生起頻度

BL (Baseline, ベースライン)  
 CT (Correspondence Training, 言行一致訓練)  
 {CT<sub>I</sub> プロンプトカード有り タイムアウト予告有り  
 {CT<sub>II</sub> プロンプトカードなし タイムアウト予告有り  
 {CT<sub>III</sub> プロンプトカード有り タイムアウトなし  
 EX (Extinction, 消去)  
 {EX<sub>I</sub> 教師のみの無視  
 {EX<sub>II</sub> 教師および生徒による無視  
 △は新しい教師役に代わった最初のセッション

### 参考文献

Risley, T. 1977 The social context of self-control. Paper presented at the Banff Conference on behavior modification .  
 Foxx, R.M. 1982 Decreasing behaviors of severely retarded and autistic persons. Research Press.